

ねこの

猫穀通信

第 5 2 号
平成 十 五 年
(2 0 0 3)
7 月 1 5 日 発行 (行)
(年 4 回 発 行)

一粒の麦

佛洵 健悟

芭蕉俳諧の魅力の一つは、様々な階層の生活者のいぶきを活写しているところにあるが、もの知りの大御所ともいふべき民俗学の柳田国男をして、「私は毎度この芭蕉の物を識っているのには驚く」(『木綿以前の話』)と言わしめているのは痛快である。

帷子(かたびら)は日(ひ)にすさまじ(まじ)鴉(カ)の聲(こゑ) 史邦
初巻(はつ巻)舂(う)を稲(いね)のこき賃(ぢん) はせを

鴉(カ)が鳴(な)く頃(ころ)になつても帷子(かたびら)(夏着)を着ていなければならぬことのやるせない風情を詠んだ発句に、脇では稲(いね)扱(あ)きに雇(よ)われて働く人のきびしい現実を付けている。

柳田(やなぎだ)の説(せつ)によると、稲(いね)扱(あ)きは二本(にほん)の扱(あ)箒(はし)で稲(いね)穂(ほ)をしごいて初(はつ)を落(お)とすとすという素朴(すぼく)なやり

方が江戸の末まで続いていたらしい。これは寡婦(寡婦)や小児(小児)の仕事でもあったというが、のちにもっと能率(能率)のよい千把(せんば)コキ(コキ)が普及(普及)し始め、これがゴケ(ゴケ)オシ(オシ)やゴケ(ゴケ)ナカセ(ナカセ)と呼ばれるようになるところに、寄(よ)る辺(へ)ない者(もの)の運命(運命)をまつさきに変(か)えてしま(しま)う技術(ぎじゆ)革新(かっしん)のもう一つの顔(かほ)がある。

そのようなわけで、この発句(はつぐ)の主人公(しゅじんこう)は女性(にょせい)であろうと柳田(やなぎだ)は言(い)う。どうだろうか。

この三吟(さんぎん)歌仙(かせん)の第三(だいさん)は「蓼(れい)の穂(ほ)に罨(ひら)のかびをかき分(わ)て 岱水(たいすい)(罨(ひら)はなめ味噌(みそ))で、これもどこか女性(にょせい)の振(ふる)る舞(ま)いのように感じ(かん)られるのだが(のだが)(今(いま)ならなめ味噌(みそ)の世話(よはな)をしたがる男性(なんせい)は多い(おほい)だろう(だろう)けれど、そう(そう)なると発句(はつぐ)の主人公(しゅじんこう)を女性(にょせい)と決(き)めて第三(だいさん)の転(てん)じにかな(かな)うのか(か)どうか。

この辺(へ)りの鑑賞(かんしょう)はそれとして、柳田(やなぎだ)が舌(した)を巻(ま)く芭蕉(ばしやう)が「物(もの)を識(し)っている」というのは、知識(ちしき)のレベル(べいる)だけでなく、他者(たじや)の運命(うんめい)に共感(きんかん)する力(ちから)についてこそ言(い)えるところ(ところ)で、土芳(つちよし)ならずとも、師(し)は如何(いか)なる人(ひと)ぞの思(おも)いを禁(か)じ得(え)ないところ(ところ)である。多くの(おほくの)人(ひと)が『七部集(しちぶしゆ)』を愛(あい)してやま(や)ない理由(りゆう)もここ(ここ)にある(ある)のではない(ない)だろうか。三百年(さんひゃくねん)前の付合(つきあ)いが、眼(まな)前(まへ)するもの(もの)のように立(た)ち上(あ)がつてくるとい(い)うのはそれ(それ)こそ芭蕉(ばしやう)の幻術(まじゆ)とも言(い)いたいところ(ところ)であるが、同(どう)時に、自(みづか)分の心(こゝろ)がそのよう(よう)なもの(もの)に熱(あつ)く感(かん)応(おう)することに、不(ふ)思議(ぎ)の感(かん)に堪(た)えない時(とき)がある(ある)。「てには(は)文法(ぶんぽう)は公界物(こうかいもの)(公共物(こうきよもの))」(『宇

陀法師(だたぼうし)』という言葉(ことば)を真(ま)似(に)るなら、感(かん)じる心(こゝろ)もまた公界物(こうかいもの)で、これをこそ伝統(でんどう)というのではない(ない)だろうか。

明雅(めいあ)先生(せいせい)の下(した)で連句(れんぐ)を学(まな)び、実作(じつさく)を習(な)つて来た(きた)こと(こと)の目的(てき)は、この伝統(でんどう)を生(な)き生(な)きと自(みづか)分の裡(うち)に甦(よみが)らせること(こと)であつた(あつた)と気づ(き)く時(とき)、個(こ)の呪縛(じゆばく)が解(と)ける心地(こゝろ)がして、非常(ひじょう)な満足(まんぞく)を覚(おぼ)える。

現代(げんたい)の連句(れんぐ)にも今(いま)様(やう)々な潮流(しやうりゆう)が認(め)られる。連句(れんぐ)形式(けいしき)にも付合(つきあ)の態度(たいど)にも、新(あたら)しい考(かん)えが進(ま)んでいるよう(よう)にも感(かん)じられる。それ(それ)らの試(し)みが、真(ま)に実(じつ)を結(む)ぶか(か)どうかは、同(どう)時代の(じだい)いぶきと生活(せいかつ)者(もの)から目(め)をそ(そ)らさない強(きやう)靱(じん)さ(さ)を持(も)つたポエジ(ポエジ)ー(ー)たり得(え)ているのか(か)どうかにか(か)か(か)つていて、俳諧(はいかい)は現(げん)実(じつ)の生活(せいかつ)を見(み)つめ(め)るところ(ところ)から出(い)発(はつ)し、又(また)そこ(そこ)に戻(かへ)つてくる(くる)しな(しな)やか(か)さを失(う)つてはな(な)らない(ない)と思(おも)う。

明雅(めいあ)先生(せいせい)の教(おし)えは、蕉風(せうふう)俳諧(はいかい)をま(ま)ぎれなく同(どう)時代(じだい)そして後(ご)世(せい)に伝(でん)えていく(いく)ところ(ところ)にある(ある)と私(わたし)自身(みづか)は思(おも)いこん(こん)でいる(いる)。もう芭蕉(ばしやう)でもあ(あ)るまい、新(あたら)しい詩(うた)は新(あたら)しい革袋(くわふく)に(に)はな(な)ないのか(か)と、これ(これ)もまた真(ま)剣(けん)な声(こゑ)として聞(き)こえてはいる(いる)が、俳諧(はいかい)俵口(はつぐち)を解(と)かず(かず)と言(い)い残(のこ)した芭蕉(ばしやう)の宿題(しゆだい)は何(なに)だ(だ)つた(た)のか(か)、そんな(そんな)こと(こと)につ(つ)ら(つ)ら思(おも)いを馳(は)せる(せる)のが今(いま)は面(めん)白(しろ)く、蕉風(せうふう)を守(まも)り、蕉風(せうふう)に遊(あそ)んで(んで)いる(いる)うち(うち)にも、いつ(いつ)か(か)きつ(つ)と素(す)晴(は)らしい才能(たのう)が出現(しゆげん)して(して)くる(くる)かも知(し)れない(ない)と夢(ゆめ)想(さう)する(する)のも楽(たの)しい(しい)のである(である)。それ(それ)も又(また)私(わたし)ち(ち)の「作品(さくひん)」には違(ちが)い(い)ない(ない)のである(である)。

貝母亭立机免状授与とその経緯

東 明雅

下鉢清子さんは昭和五十九年以來の連句のお仲間であり、それと共に私の生涯の俳句の師であった故草間時彦先生を中心とする江戸川医師会の「鴨の会」の一員として、ともに草間先生のやさしくまたきびしい指導を受けた仲間である。私は凡そ十年余りこの人たちに採まれたお蔭で漸く俳句集一冊を公にする事が出来た。草間先生及び「鴨の会」の御恩は終生忘れぬところである。

その下鉢さんは、すぐ私の柏連句会に参加してこられたが、ちょうど私と同じ柏にお住まいのところから、次々に俳句の方の有力なお弟子さんを連句会にご紹介下さった。久保田庸子さん、梅田利子さんなどその頃からであり、お蔭で柏連句会は盛り上り、「柏連句会報」は百六十号を越し、その百六十三号は「貝母亭清子宗匠立机式」の特集号となっている。二十余年下鉢さんとお付合して一番有難かつた事は「猫養作品集」前後十三巻の編集・校正を有能なお弟子さんを総動員して実行されたことで、この三月最後の「猫養作品集Ⅻ」の校正をもって来宅され、「立机して貝母亭と名乗りたい」と申し出があった時、一も二もなく賛成した次第である。



貝母亭清子宗匠

立机と柏連句会

貝母亭 清子

立机することがあるならば柏でと念願していたので、この度、東明雅先生よりお許しがあり、柏連句会主催の立机式が実現したことは何よりも嬉しく、先生ご夫妻をはじめ、運営に終始お力添え下さった久保田庸子、梅田利子の両氏、謡「烏帽子折」、吟舞「黒田武士」で盛り上げて下さった坂本孝子、吉藤とり子の両氏、ご参加の各位に厚く御礼申しあげる。折もよし我が家の貝母百合が見頃であったことも良い記念となった。

柏連句会は、明雅先生が信州大学を退官され、柏市にお住いに移された昭和五十五年に発足となった。この会は関東地方に於ける先生の連句活動のスタート地点、猫養会の母体であり、今日の連句隆盛に繋がった意義深い

会であるという位置づけをすることが出来る。私が明雅先生に初めてお目にかかったのは昭和五十八年、江戸川医師会内の「鴨の会」という俳句会。指導者は当時の俳人協会理事長でいられた草間時彦先生、その隣の席にお座りの方が東明雅先生と御紹介があった。この会は二次会が新小岩駅前居酒屋でというコースで、呑むほどに食うほどに侃侃諤諤と、実に大らかな楽しい刻を過ごすのである。明雅先生と草間先生とはお互いが連句の師であり俳句の師であると仰った。以来帰路も一緒に緒させて頂き、船橋經由東武線で柏方面へと。これがご縁で柏連句会の連衆の一員に。

忘れられない参加第一回、俳句以外は無知な新入生を懇切丁寧に指導下さったが、心はもう畏縮するばかりに刻が過ぎ、次は恋の句と促されて安心し「猫の恋」の俳句を出す、人間の恋ですと教えられたこと。共に新入生の北見さとのさんの恋句、《姑娘のちらりと見ゆる柳腰》を、これは「見する」でしよう（姑娘のちらりと見ゆる柳腰）と直されたこと、たった一字の違いで斯くも妖しき姿態の醸し出されるものかと驚嘆、それから一語でも多く先生の言葉を聞きたい付味を知りたいと、万難を排して付いて回ることに。名桜や史跡を尋ねる旅や、ご夫妻のプライベートに近い旅にもお供をさせて頂いた。車中の付回し、宿での句会、無言の教えも多く賜り、また新人を育てるとはこのようなものか

と悟らされ、指導の有り様にも開眼すること
が出来たのは、何と恵まれていたことかと。
宿に着くと発句勉強として二十句会、これ
はもう必死で、併し合評に入ると遠慮会積な
く御託を並べて。或る旅の句会中に先生がす
つと小短冊を私の前に、拝見すると、

けちばかりつける女や藪虱

若輩の分際で申し訳ない、俳句的に考えて
ばかりと大いに反省しつつも、また次回では
無礼なことを言ってしまう。そんな雰囲気
の中で育てて下さって今年は二十年、数えてみ
ると同時同場が九百回以上になるのである。
賜りました文台には

風光る玉子の黄味の濃くなりて 明雅

の御染筆。「鴨ひよの会」の席上で草間先生が
激賞された御句である。文台にお書き下さっ
た意味の深さを思うとき、誠に有難く、益々
この道の「玉子の黄味の濃く」なるようにと
努めねばと。これからも藪虱はしっかりと裾
にひつついて行こうと思う。

恩寵を畏みし日の花衣 清子

柏連句会の作品は毎月五十嵐譲介氏が冊子
にして纏めて下さるようになり、立机当日の
作品六巻は百六十三号となった。現在柏連句
会の幹事役は武井稚子氏（明雅先生ご長女）、
猫養会柏支部はその中にご一緒させて頂く形
である。支部の幹事役は久保田庸子氏として
運営されている。

祝立机 貝母亭清子宗匠

源心「ばいもの花」の巻

坂本 孝子 捌

卓の上ばいもの花と狸た毛筆

東 明雅

名香くゆる麗日の宴

坂本孝子

鼓笛隊揃ひの服に東風うけて

下鉢清子

ドミノ倒しで笑ふ馬跳び

和田順子

粗土を泉に洗ふ農婦たち

荒川有史

ひまわり迷路照らす月影

河内 薫

追ひかけて追はれていつか寄り添ひぬ

順

成田離婚は猫が原因

史

海広し波を数へて日が暮れて

薫

自在に曲がるストローの首

清

善と悪オレが決めるとブッシュさん

薫

内なる荒野続いたたかひ

史

年の花恩寵いくつ重ね来し

清

編み直し着せ母のセーター

順

高々と人を嗤ふか寒鴉

雅

いよいよ尖る魔女の鉤鼻

順

ロゼワイングラスの向かう覗く夢

清

金魚の餌に掬ふぼうふら

史

御器囃のやうな妓に吸ひつかれ

雅

何も知らない若き大黒

同

カチンコが変身のときエキストラ

清

山の端洗ふ通り雨なり

孝

幾多郎の哲学の道月明く

雅

また買ひ足してつん読の秋

順

おくつきも実家まも静かな冬隣

清

大八車の車アートに

薫

肩衣に許されませい花一枝

孝

照りてかげりてけふは暖か

薫

平成十五年四月十三日首尾

於 光ヶ丘近隣センター

立机祝句

卓の上ばいもの花と狸毛筆

東 明雅

荒起し貝母見事に開きけり

東 郁子

花爛漫根は八方に地を掘む

坂本孝子

咲き満ちて立机を祝ぐや花の舞ひ

内田麻子

なほ高く上りうたへや告天子

上月淳子

花鳥のこぞり寿ぐ立机かな

市野沢弘子

陽光のあまねくさして花大樹

原田千町

松柏の芽吹き楽しや石の鉢

豊田好敏

若みどり大き樹蔭を夢見けり

鈴木千恵子

手賀沼や初鮒重き竿の先

青木秀樹

清清と曙杉の芽ぶきかな

松島アンズ

俳諧の幸ふ町の穀雨かな

佛淵健悟

やはらかき春ははくりの花つけて

浅賀丁那

女の松の動き優しさ風光る

久保田庸子

花満ちて立机の祝ひ華やかに

桑原美津

真つ赤な火育てて立机春の百合

吉村ゑみこ

わらんべにかこまれてゐる貝母かな

八代 嫺

北総にははくりの輪や春立机

鈴木美奈子

侘と寂淡きトーンの花貝母

武井稚子

第十七回 藤祭奉納正式俳諧

次第 役割

一	席改め	宗匠	原田 千町
二	席入り	脇宗匠	橋 朱鷺子
三	配硯	副宗匠	青木 秀樹
四	献花	執筆	近藤 守男
五	執筆呼出し	知司	峯田 政志
六	文台捌き	副知司	日高 玲
七	俳諧興行	座配	松本 碧
八	花前	座見	佐古 英子
九	玉串奉奠	花司	八代 嫺
十	花の句披露	配硯	式田 恭子
十一	端作り	配硯	鈴木千恵子
十二	吟声	老長	豊田 好敏
十三	文台返し		
十四	作品奉納		
十五	納硯		
十六	挨拶		
十七	退席		

平成十五年四月二十五日
於 江東区亀戸天神社

奉納 俳諧之連歌

二十韻

藤波や戦なき世の来たれかし

亀の甲羅に止まる蝶々

春蘭けてコンダクターのかるやかに

ステンドグラスに見入る幼子

聳月のかけらを拾ひたる

物の音の澄む坂がちの街

お待たせと君の息には林檎の香

ドッグ・カフェで忍び逢ふ仲

問診票二つ三つの嘘を書き

ころがる石に苔なほも生え

緑陰に憩ふ農夫の小昼どき

そつと取り出す冷のいっぱい

パンドラの箱の奥処にある希望

大統領はフアザコンと聞く

抱かれて兎のやうに眠る月

互ひの胸を夢のゆき交ふ

リニアカーテスト順調甲斐の峽

智慧の輪さがす若き山僧

花よ花よいろにも出でて散り行くよ

ワンラウンド了へ楽し野遊

秀樹

好敏

嫺

朱鷺子

丁那

玲

英子

碧

了齋

志世子

恭子

千恵子

一郎

健悟

昌子

暁巳

美奈子

千町

守男

藤祭奉納二十韻集

「昨夜の雨雫」

秋山 志世子 捌

藤房やきらりと昨夜の雨雫

轉りのなか集ふ人々

風船を見上ぐる吾子の手を引きて

ポップコーンの匂ふ街角

マンションの窓を隈なく望の月

思ひつりて鳴らすほほづき

近松の死出の道行身に入みて

最終便を告ぐる案内

ウイルスとヒトの戦ひ果てしなく

風邪引きねずみスリッパの中

裏木戸でばったり会った雪女郎

大吉と出る恋のおみくじ

シャンパンとキャビアで祝ふ婚記念

月に飛び立つ茶羽ごきぶり

甚平にかんかん帽の啖呵売

恐いものなし肥後のもっこす

極むれば諸礼停止の境に入り

加齢ですよとたはやすく言ひ

ジョッキの掲ぐるカッパ花吹雪

弥生山から望む弥生野

志世子

碧

一郎

達子

たつみ

碧

郎

み

達

々

郎

々

み

世

碧

み

達

郎

碧

連衆 松本碧 古賀一郎 篠原達子
山寺たつみ

「藤祭り」 上月 淳子 捌

拝殿に風吹き抜くる藤祭り

淳子

春を尽くして響く吟声

美奈子

団扇張るうからの集ひ賑やかに

路子

辛く煮しめた牛蒡蒟蒻

豊美

裏山も宅地造成夏の月

要子

燃えるところを掻き立てる冷酒

実

触れたくて触れられたくて十七才

奈

いつの間にやらバリヤフリーに

路

イラク人のイラクのためのイラク也

奈

砂嵐巻く水洒れし谷

豊

狐火のちらりちらりと光をり

要

女の髪も薄くなるのね

路

シルバールのダンス教室もてる彼

実

軽々と抱く僕はバトラー

奈

月の下案山子は派手を競ふらん

豊

納屋の入口揺れる干柿

実

鍋奉行お国自慢のきりたんぼ

豊

ひとつ覚えの唄は追分

奈

止まると見えて流るる花筏

路

ふらこ漕げば透き通る空

要

連衆 鈴木美奈子 倉本路子 高橋豊美
山本要子 梅田實

「白藤や」 式田 恭子 捌

白藤や絵心てふを語り合ひ

恭子

太鼓の桶をくぐる雨鷲

忠史

甘辛く棒鱈を煮る母ならん

ふみ

フックに吊す皆の歯ブラシ

曉巳

故郷に送るお歳暮月の街

麻子

湯冷めするよと言葉やさしく

千寿子

遊んでもラストダンスは私だけ

み

内緒で飼った牡の黒猫

麻

高層の窓にくつきり富士の山

み

からからからと回る矢車

史

西日灼く参謀本部愚かしき

巳

一パーセントで当確が出る

史

漱石の孫と漫画のロンドン記

麻

跳人いっしつか脇道に入り

史

新薬を背中に刺したおちやつびい

巳

月受けとめるふくよかな胸

み

古本に埋もれて囁る焼竹輪

千

軽トラックは荷台満杯

千

教会の鐘の余韻に花散りぬ

恭

六郷河原きそふ大風

麻

連衆 内田麻子 島村曉巳 根津忠史
中村ふみ 紺野千寿子

「光降る」 鈴木 了斎 捌

藤房や墨東雨と光降る

了斎

心字の池に数珠子條々

真呂

のどらかに山高帽の塵とりて

丁那

思はず落す赤いメモ帳

一恵

人を待つ梧桐の蔭の月の席

千晴

お化け屋敷で袖を放さず

未悠

蠅座の女上司は深情

呂

ピッコロを吹くやうに嘘つく

那

フセインに昨夜会ったよ赤坂で

悠

制御不能の改造車なり

晴

閑さうな顔を寄せぬる神の留守

恵

冬至蒟蒻ぶるぶると煮え

那

ことされる間際ひと声あほんだら

晴

多情の始末引きも切らざる

恵

月の舟ケーベンハウンの恋なりき*

那

秋螢飛ぶ流滴の宿

呂

水琴の音も鎮まりて風炉名残

呂

轆轤を回す胡麻塩の髭

悠

山裾に双樹の花を仰ぎ見つ

恵

牧牛の背に止まる春禽

晴

*ケーベンハウンはペンハーゲン(デンマーク語)

連衆 木村真呂 浅賀丁那 山崎一恵
福永千晴 棚町未悠

「藤房に」 副島 久美子 捌

藤房に触れれば浄土風の中 久美子
 てふてふの影映す池波 健悟
 踏み足を替へるスキップ春開けて 泉子
 社内託児といふもあるらし 一枝
 六本木汐留界限月自慢 英子
 夜這の星のすいと流れる 良彌
 虫の音に聞き間違へしプロポーズ 悟
 家裁調停粹な計らひ 英
 世界中敵に廻したならず者 彌
 大繩小繩潜る愉しさ 泉
 花柳菜溶かしチーズで召し上れ 枝
 寝て物を書く髭の文豪 悟
 縁の下鼠の家族棲みついて 泉
 貴方の嬰ならいくらでも産む 英
 月明に扇の秘画を開きたる 悟
 はたた神来て村を一喝 泉
 インタビュ―人柄にじむゴジラ君 彌
 酒は友達酒の友達 悟
 飛花落花回り舞台上に橋が響く 枝
 セピヤ色なる写真あたたか 泉

連衆 佛淵健悟 青木泉子 西田一枝
 佐古英子 佐藤良彌

「藤房の雫」 中野 昌子 捌

藤房の雫水輪のひろごりし 昌子
 亀全天に春惜しむ頃 千恵子
 風車とびだす絵本作りゐて 壽子
 ぐるぐると塗るクレパスの青 啓子
 スカールのオールの先に月砕け 好敏
 天満祭に彼を探す眼 敬子
 逞しき腕に強く抱かれたい 千
 数字で解けぬメビウスの帯 敏
 楽聖の遺伝子情報高く売れ 啓
 透かし彫にも上手下手あり 壽
 初句会精進料理ととのへて 敬
 寒灸 据う白き臍 敏
 触れあへばショート寸前散る花火 壽
 月ほどきゆく恋のしがらみ 啓
 むしられた鶴の羽を葉にし 壽
 古酒と新酒の夫々の味 千
 脱北者悲しい過去を語りだす 啓
 街から街へ旅のサーカス 千
 浮かれ出たゴマファザラシ花の雲 敬
 欠伸しながら笑ふ山々 執筆

連衆 鈴木千恵子 杉山壽子 小池啓子
 豊田好敏 須賀敬子

「学成らん」 生田目 常義 捌

学成らんまなざしあげよ藤祭 常義
 親子連れ立つ春昼の橋 わこ
 琴弾鳥練習曲に混じりゐて 朱鷺子
 コーヒーの香の満つるリビング 政志
 菩提寺へ峠越えゆく雪催 華蔵
 すれ違ひたる夜回りに月 朱
 若女形人形振りに息を呑み 朱
 あの娘好みの破れしジーパン わ
 ある時は脂肪を燃やす糖衣錠 朱
 誰か来たよと知らず愛犬 朱
 夏蝶をぼうつと見をり駐在さん 朱
 御輿連中西へ東へ 朱
 ニューヨークゴジラの貌もなじみきて 全
 TRON坂村爽やかさ佳し 全
 蛾眉夫人この日の時待ち兼ねる 全
 金も愛をも捨てるやや寒 朱
 一城を支へし沃野広がりて 朱
 釣竿かつぐ翁背高し 朱
 人生は須臾の夢ぞと花に酒 朱
 光さす虹梁にまつはる 朱

連衆 横山わこ 橘朱鷺子 峯田政志
 山田華蔵 八代嫺

「面々の」

林 鐵男 捌

「詩心いさむる」 日高 英二 捌

「哲学をする亀」 山田 美代子 捌

面々の雅におはす藤祭り

はづむ会話と囁りの声

春障子猫の出入りに明けおきて

ハンバーガーが僕は大好き

繰り返し月を揺らして逆上がり

じつと動かぬやせた蓑虫

知らぬまに囮籠とはご無体な

すっかり狎れし肌の艶やか

買ひ替へはハイブリッド車と決めてをり

坂東秩父西国の旅

釜飯に別注文の心太

漫画になって河童百態

ご寮さんしつかり者で器量良し

最愛ぢやない俺のポジション

イヤリングごとりと置いて冬の月

湯婆抱いて日がなとろとろ

教へ子の名前忘れる老教師

競ふ早慶權を揃へて

風出でてゆさりと花の下枝かな

蝶舞ふ夢に酔ひて候

連衆 原田千町 池田やすこ 黒川裕美子

松原弘子 青木秀樹

藤波や詩心いさむる大太鼓

あつけらかんと鶯のレプリカ

春シヨールLANのシステム小器用に

喫煙場所へ向ふ早足

合作の箱庭にさす月の影

悴たよりにできぬ短夜

釣書に病歴なしと付けたして

女将もこなす青い目の嫁

納豆にしんこ味噌汁なま卵

スローライフを起ち上げる村

境内にちらほら仰ぐ冬桜

神農祭に財布すらるる

茶碗酒酌みつつ膝にしなだれて

めじよけねえとは惚れたってこと*

月の船劇画のやうな世を渡り

薄の原に光るだんびら

また止る通勤電車冷じく

OFFにしても触れる携帯

花に降られ安土城址を夢の間に

マラソンランナー陽炎の道

*めじよけねえ!!かわいそう(山形弁)

連衆 梅田利子 青島ゆみを 登坂かりん

岩垂景翠 関口靖子

藤波や哲学をする亀の群

笙の音ひびき深みゆく春

思ひ思ひの絵を描きて

右と左に別の靴履く

ギヤマンの盃の月光プリズムに

ワンシヨルダの涼しげな肌

押しつけの見合ひだったが一目惚れ

田舎教師と有機栽培

谷川岳に慰霊碑寂と佇めり

風に吹かるる鴉点々

不景気にしばれし旅の役者達

股火鉢する鬼のデカ長

ボディビル自慢の彼は甘党で

別れの朝をかこつやや寒

月の河岸魚躍る声のいさぎよく

残る蠅にも五分の意地あり

シスターと共に祈りし反戦を

奇蹟の水はほどほどに効き

城石の毫も隙なし花吹雪

腰をやすめる畑打ちの人

連衆 久保田庸子 日高玲 近藤守男

市野沢弘子 花巻珠枝

「短夜」

短夜や志ん朝偲ぶ藍微塵
 嫋嫋と小夜鳴き鳥や夜の短か
 短夜やをんなと埋める虫食ひ算
 短夜や六根の声麓村
 短夜や古きミシンに差す油
 短夜や供華も芥もメナム河
 短夜や女の足に合せつゝ、
 短夜に絵硝子越しの光かな
 短夜やさぐる団扇も手に触れず
 短夜やふと訝しむ妻の黙
 短夜や班女の艶な舞姿
 明け易し五人一間のクラス会
 短夜やまばたきもせず回遊魚
 短夜に百里行軍十七歳
 短夜や繫舟に濡かすかなる
 短夜や吸い寄せられし磁力あり
 筒抜けの隣家の算段明易し
 短夜にペンライト振るライブかな

優秀

* 嫋嫋と小夜鳴き鳥や夜の短か アンズ
 短夜は夏の季語。秋の夜長に対し、すぐに
 明けてしまう夏の夜を惜しむ気持ちが含まれ
 ます。明け易しも同じです。

小夜鳴き鳥はナイチンゲールのこと。ナイ

チンゲールを鶯と言う場合もあるようですが、
 厳密には違う種です。春ごろから朝夕綺麗な
 声で鳴きます。「一夜の宿をありがとうござ
 いました。」と挨拶の一句。どんな一日が始ま
 るのか楽しみですね。

* 筒抜けの隣家の算段明易し 沙悟浄

落語の世界を覗いているようですね。「明
 易し」の季語が利いています。昔なら長屋、
 今では夏の開放的なベランダなどから、やり
 くり算段の音が聞こえ、ついつい明け方まで
 聞いてしまいました。庶民の日常生活が面白
 く出ています。

* 短夜にペンライトふるライブかな わこ

野外のライブコンサートでしょうか。涼し
 い風が吹いてペンライトが波のように揺れて、
 夏の夜を楽しんでいます。高揚感のある余情
 が面白い一巻になりそうです。

佳作

* 短夜やまばたきもせず回遊魚 美奈子

* 短夜に百里行軍十七歳 未悠

* 短夜や繫舟に濡かすかなる 了齋

惜しい句

* 短夜や志ん朝偲ぶ藍微塵

「志ん朝偲ぶ藍微塵」は、時を得てしみじ
 みとした挨拶になっていますが、「短夜」の季
 語が「偲ぶ」という気持ちに合わないのが残
 念です。季語の持つ心も生かしましょう。

* 短夜や供華も芥もメナム河
 悠然と流れる大河メナム、供華も芥も巻き
 込んで暮れてはあける。とたいへん臨場感の
 ある風景です。しかし、日本よりも赤道に近
 いタイランドでは、秋の夜長も夏の短夜もあ
 まり意識できないのではないのでしょうか。内
 容がいいので惜しい句。

「冷酒」

海峽の赤道祭の冷酒かな
 冷酒や下戸は持参のマイグラス
 割り切ったはずの二人の冷し酒
 野舞台や太夫に欲しき冷し酒
 冷酒や伸びて丸まる猫に似て
 蘆薈を泳へて聴くや冷し酒
 冷し酒宿坊灯す善光寺
 冷し酒グラスに滲む葉影かな
 漬物は御意にかなわず冷し酒
 尻青き論議しばらく冷酒かな
 冷酒くむ半被の背ナの紋所
 冷用酒玻璃のセットの主亡く
 品書にどぜう跳ねるや冷し酒
 冷し酒アクアマリンの指輪して
 かくや漬け冷酒の旨さのいや増せり
 冷酒のなんで日のある通りかな
 張力の盛り上がりけり冷し酒
 冷酒買ふて行き先変る夜汽車かな
 冷酒やそろばん店の賣じまひ

優秀

* 冷し酒グラスに滲む葉影かな 常義

冷酒は、爛をしないでそのまま呑むお酒を指しますが、冷し酒は、氷などに浮かべて頂くお酒のようです。夏の床料理などでしょうか。辺りの緑がグラスに映って綺麗な句ですね。十分に情景を出しています。

* 品書にどぜう跳ねるや冷し酒 美奈子

泥鰌は夏の季語ですが、これは品書の泥鰌ですから季重ねにはなりませんね。その場の雰囲気は良く出ていてお店への挨拶になりました。どちやうでなく「どぜう」が江戸風。

* 冷し酒アクアマリンの指輪して 未悠

きれいな水色の貴石は、幸せを呼ぶと言われて人気があります。そういう事に敏感な現代女性でしょう。お洒落に冷し酒を呑んでいます。居合わせた女性への挨拶がいまいきと詠めています。

佳作

* 海峡の赤道祭の冷酒かな 暁巳

赤道の緯度0線を越える時の祝宴。参加しておれば感動です。

* 漬物は御意にかなはず冷し酒 鐵男

「御意にかなはず」がなかなか面白いのですが、一巻の広がりを持たせてしまうのでは。

* 冷酒買ふて行き先変る夜汽車かな 沙悟浄
無頼ぶりが面白い一巻になりそうです。

発句の作り方

秋元 正江

連句にでかけるときは、実際はいらなくても嗜みとして発句を用意するように心掛けましょう。

次に会場には時間ギリギリにすべりこんだり遅刻をしないこと、早目に着いて周辺の自然に触れるゆとりが欲しいのです。

着く迄の気象、季語に心を深めて、柔軟でみずみずしい感性を保つことが必要でその心のたゆたいを切りとって発句に仕立てます。

発句は挨拶だからといって、季語、切字を入れて事柄を説明しただけの安易な句にまとめないように気をつけましょう。花を詠んでも自分という人間の表現です。

教室で席題の選をするに当って、俳句として選ぶのか、発句として選ぶのかという質問がありました。それは勿論発句の条件をみたすものを選んで欲しいということに違いはありませんが、敢えて俳句としての芸術性にすぐれている句はそれを捨てざるべきではないと思います。佳句を鑑賞することも実作の力をつけますし、その句のセンス、作り方を学ぶチャンスは失ってはならないのです。

発句は歌仙なら三十五句を引っぱっていく巻頭の句であり、発句と俳句は元は同じで俳句の作り方を知る必要があります。完全に独立して脇が付けられない俳句（つまり発句として成立しない）は、それを見分けるべきですが、逆に発句の条件をかたくなに狭い範囲にしてしまうと、発句は新しみのないありきたりのものになってしまいます。

発句の在り方を踏まえた上で、ことばは、曖昧なはつきりとした粹のない所に美があるのです。かわたれどきのような昼でも夜でもない天地の言霊が入れ替る一瞬のあわいをみつけ、歳時記と好きな句集を読んで下さい。

（元朝日カルチャー「連句入門」講師）

「季刊連句」四十五号（平成六年六月）より転載

次回兼題 小鳥来る・後の月

各題一句づつ一人二句まで。

講評 和田 順子氏（絵硝子主宰）

佛淵 健悟氏（ACC講師）

切 八月末日

発表 五十三号（十月十五日発行）

宛先 〒155-0033

世田谷区代田3-19-8

Fax 03-5486-9751

日高 英二・玲

雅号での投句も結構です。

皆様のご参加をお待ち致しております。

桃径庵和子宗匠三回忌追善

平成十五年五月十八日

於 桃径庵 四の宮ブルー

追善発句

牡丹散りてはや二年か和子の忌 東 明雅
 麻雀の面子揃ふや走り梅雨 青木秀樹
 アベリヤの蓄みてをりぬ桃径庵 秋山志世子
 とこしへの微笑や庵の白薔薇 浅賀丁那
 夏草のしげりなつかし桃径庵 池田やすこ
 目が覚めて部屋に漂ふ新茶かな 石原英一
 二年の思ひ集ひて庭石菖 江守麻子
 掛香や風の残せし忘れもの 大島洋子
 師の笑みにほんのりとある薄暑かな 川名将義
 一つ葉や二世の育つ三回忌 蒲原志げ子
 きりとした和服姿や夏の雨 北村良輔
 母の間の楠公父子や青葉風 古賀一郎
 切絵図の町名残る夏柳 近藤守男
 面影や女一代江戸切子 坂本孝子
 黒衣着て三千世界を夏の蝶 佐古英子
 星涼し筆西窓に置いたまま 式田恭子
 花ざくろ母娘二代の俳諧師 島村暁巳
 花なすの夕べ濃くなる桃径庵 杉山壽子
 右肩でくるり回れば夏燕 鈴木美奈子
 薫風の笑まへばそこに在ますかり 鈴木了斎
 しはしはと雨降る庭のダチユラかな 豊田好敏
 野の道の一筋白しうすごろも 永島靖子
 豆飯の円き握りの懐かしき 中野昌子

ひよいとまたうたた寝であれ若葉風 中林あや
 蚕豆を真青に茹でて供すらん 中村ふみ
 声明に泛ぶ面影青若葉 難波さえ子
 押入に喋りたがってる古団扇 登坂かりん
 夏帯の和子宗匠微笑めり 間佐紀子
 薫風や女の意地の裏表 花巻珠枝
 涼風に乗る御意見の江戸言葉 林 鐵男
 佳き里や虞美人草も稀ならず 日高英二
 受け継ぎし盃漲るや若葉風 日高 玲
 藻の花に声あり縁の昼徳利 佛洵健悟
 尋ねたき言葉あまたや思ひ草 松本 碧
 師の逝く日あつげらかんと夏の青 村山加津枝
 紫の烟湿らすついでりかな 山口美恵
 走り梅雨いさぎ良き人笑み残し 山田美代子
 引き返すことは叶はず著我の花 山本要子
 春灯や式台ほのか猫の家 若林文伸

追善歌仙「二夏や」 式田 恭子 捌

二夏や母屋の広き縁に立つ 式田恭子
 更衣して軽き手拍子 鈴木美奈子
 ナビゲータースピード出せと指図して 林 鐵男
 重ね弁当詰める煮卵 江守麻子
 待宵は背丈の順に児が並び 石原英一
 拝み太郎も控へをります 奈
 パリコレのショー次々と冬隣 奈
 後でこつそり渡すチヨーカー 奈
 藤椅子に鎖骨ちらりと儂なげな 奈

鼓動は遠き海鳴りのやう 若手しかメール打てない社内報
 ボーナスイヤと月にお願ひ 道のなき道の彼方に冬館
 埃うつつら黒檀の卓 父さんに貰ったパジャマ裾を折り
 鍵じやらじやらと錠にをさめる 爛漫の花の下臥せ盃かかげ
 心字池行く春のパラソル シオサイト乾く残響弥生尽
 演劇集団越える国境 税関に渡り鴉を仰ぎ見て
 法王庁に穴掘りに行く 縫箔を映す切子のきらきらと
 トランプ飛ばすマジックの種 家元は四人目の妻紹介し
 浮気はいつもおとなりの町 ベッドから真珠のピアス滑り落ち
 なくした針がひよいと見つかる 夕月夜さんさしぐれの声の寂
 古酒の蘊蓄猫に聞かせる 言の葉の力信じて秋の筆
 人目忍んで貼る千社札 盲牌にいたる雀歴五十年
 煙草のけむり輪になつて泛き 花便り雲に託さん空のはて
 受け継いでゆく難の塗櫃 平成十五年五月十八日 首尾
 於 桃径庵 四の宮ブルー

麻 恭 男 英 奈 奈 英 男 恭 男 英 男 恭 男 奈 男 英 奈 奈 麻 恭 男 男 奈 奈 麻 麻

四宮今昔

式田 恭子

「風鈴」の巻

風鈴をひねもす聞くや休刊日

明雅

藍深まりしあぢさゐの毬

靖子

面打師木屑の中に埋れて

隆志

「走り梅雨」の巻

走り梅雨太公望の腕を撫し

杉亭

薄紫にゆれる水草

和子

4WGワックスかけし新車にて

進

昭和六十二年六月一日、四宮連句教室は萩窪と井萩の中間に位置した公民館に明雅先生をお迎えして、この二巻ではじまりました。何年かたち、桃井の拙宅に場所が変わり、母は手料理で皆様をお迎えするようになりました。その最初の平成二年九月二十四日は大勢で三巻の興行です。

「秋麗ら」の巻

水浴びて雀機嫌や秋麗ら

明雅

辿る小路に曼珠沙華揺れ

政志

調律のグランドピアノ月待ちて

和子

真夏のような日が続いた二年前の五月、母は帰らぬ人になりました。残されたものは書きかけの原稿と、ワープロに保存されたA C Cの教材と連句と発句と・・・千代紙で表紙

を作った膨大な数の連句帖。季寄せと白い短冊はいつもの鞆の中にありました。

母の連句帖には連句を始めてから亡くなる直前までのすべての作品が毛筆で書かれました。時には写真入りで、その場の様子が手に取るよう。連句をしている時の母の楽しそうな顔：

長いような短いような二年がたちました。その間、四宮会は四の宮ブルーと名を変えて続けさせて頂いています。そのようにして皆様の一座に加えて頂くようになり、母の連句への情熱も愛も以前よりずっと分かるようになりました。母にとって連句は生き甲斐だったのだと改めて思いました。毎月の四宮会もどんなにか楽しみだったことでしょう。

現身に言の葉残し夏めぐる

恭子

三回忌はこの萩窪の家、桃径庵で皆様と連句をさせて頂くことができました。母が元氣だったときと同じように。

母はいつも前の日には部屋の掃除をして、買い物にでかけました。帰って書き物をしながら、とろ火で煮物を始めます。電話で、「明日のおかずはな〜と」ときくと、ふふつと嬉しそうに話してくれます。

当日早く起きた母は玄関から始まって前の道をせつせと掃きます。そしてきれいになったところへ水をば〜っと思いつきよく...

追善半歌仙「桃若葉」

膝送り

桃若葉角を曲がれば逢へさうな

了斎

とび出してくる高き打ち水

恭子

三尺の童子に沓を運ばせて

健悟

額の髪を風が振り分け

玲

月のぼる海に曳き出す漁舟

丁那

秋の恵みは樵の森から

加津枝

集ひ来るよか男らの村芝居

英二

にやにやせずは何か言つてよ

守男

鏡には蝮の裔が恋呆け

美恵

震度は4とニュース速報

佐紀子

友達に同時のメール打てません

恭

そつと捕へる霜の夜の鶴

斎

藜莢の零れて月の寒々と

玲

突堤の端立てるマネキン

悟

よみがへるアトムに託す夢あまた

枝

高田馬場に蝶を飼ふひと

那

吉祥天ふつとためいき花吹雪

男

おぼろおぼろに消えてゆく詩

恵

平成十五年五月十八日首尾
於 桃径庵 四の宮ブルー

皆様お集まり頂き本当に有り難うございました。母も喜んでいいることと思えます。

伊勢派散策 1

立花北枝 | 元禄二年の十五日余

橘 朱鷺子

「季刊連句」創刊号に明雅先生は「先師声
丈翁の教えにまかせ、蕉風伊勢派の伝統を守
り、その中で真の新しさを模索して行きたい
と思う」と述べられている。

先生から賜った伝道書の十番目に我名を見
出した時の喜びと感動は忘れられない。

蕉風伊勢派の末につながる者として、伊勢
派の人々の面影を探っていたと思う。

伊勢派は、伊勢山田の神官であった岩田京
兎、同じく御師であった中川乙由らによつて
成り、伊勢に地盤があったので伊勢派と呼ば
れるが、伊勢一円とともに北陸にも大きく地
盤を広げていた。伊勢神宮の御師によつて広
められたとも言われる。其角の江戸派に比べ、
支考の美濃派と共に田舎蕉門と呼ばれたが、
「軽み」の風を継承、平明軽妙な作風を主体
に今日に至っている。

伊勢派の系図の筆頭にあげられるのは「山
中問答」の立花北枝である(？一七一八)。
兄彦三郎牧童と共に、前田家御用の刀研を業
とし、通称研屋源四郎、号は鳥(趙)翠台、
寿天軒。小松生れ。金沢貞門系であったが、
元禄二年(一六八九)奥の細道行脚の芭蕉に
入門、越前松岡まで同行した。

この年、七月十五日芭蕉は金沢に到着。曾
良旅日記に「十七日翁源意庵へ遊」とあるの
は北枝邸のことである。金沢市の、久保市乙
劍宮の向つて右隣が北枝宅跡と言われている。
因みに筋向かいには泉鏡花が少年時代を過した
家である。

金沢滞留中の翁は、土地の連衆に歓待され、
連日のように俳諧興行があつた。

四句「寝る迄の」

於 宮竹屋(宿)

寝る迄の名残也けり秋の蚊屋 小春
あたら月夜の底さし切 芭蕉

初嵐山あるかたの烈しくて 曾良
江ぶちのり越ス水のささ魚 北枝

半歌仙「残暑暫」

七月二十日 於松玄庵斎藤一泉宅
残暑暫手毎にれうれ瓜茄子 芭蕉

みじかさまたで秋の日の影 一泉
月よりも行野の末に馬次て 左任

77 ふたつ家はわりなき中と縁組て 一泉

さざめ聞ゆる国の境目 芭蕉
糸かりて寝間に我ぬふ恋ごろも 北枝

北枝は素朴、恬淡とした人柄であつたらし
い。発句、付句にも素直な句が多い。

一田づつ行きめぐりてや水の音(統猿養)
かまきりや引きこぼしたる萩露(俳諧書留)
笠提て墓をめぐるや初しぐれ(去来抄)
柿の袈裟ゆすり直せや花の中(炭俵)
龍馬や顔に飛つくふくろ棚(統猿養)

翁に越路の蓑を贈りて
白露も末あら蓑の行衛かな (猿養)

この蓑は「幻住庵記」に「越の菅蓑斗、
枕の上の柱に懸けたり」と出ている。

元禄二年七月二十四日、翁と曾良は金沢を
発ち、小松に向つた。北枝も随伴する。

世吉「しほらしき」

七月二十五日 於 藤村鼓蟻宅
しほらしき名や小松ふく萩芒 翁

露を見しりて影うつす月 鼓蟻
躍のおとさびしき秋の数ならん 北枝

27 乞食おこして物くはせける 曾良

蜂の行ては笠に落かへり 北枝
茶をもむ頃やいとど夏の日 翁

ゆふ雨のすず懸乾にやどりけり 斧卜
子をほめつつも難すこしいふ 枝

七月二十七日、多田八幡宮へ句を奉納、
あなむざんやな甲の下のきりぎりす 翁

幾秋か甲にきへぬ鬢の霜 曾良
くさずりのうら珍しや秋の風 北枝

同日山中温泉着。宿は泉屋久米之助方。

八月五日、病んだ曾良が先に立出する際の
餞別の歌仙が「山中三吟」・「燕歌仙」と呼ば
れ、「翁直し」の一巻として有名な「馬かりて」
の巻である。翁の添削と評語を北枝が書留め
たものが残されている。例えば四句目まで
の初案は、

馬かりて燕追行わかれかな 北枝
花野に高き岩のまがりめ 曾良
月はるる相撲に袴踏ぬぎて 翁
鞘ばしりしを友のとめけり 枝
であったが、翁は次のように直して治定して
いる。

歌仙「馬かりて」

馬かりて燕追行わかれかな 北枝
花野みだるる山の曲め 曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて 翁
鞘ばしりしをやがてとめけり 枝

27 遊女四五人田舎わたらひ 良
落書に恋しき君が名も有て 翁
髪はそらねど魚くはぬなり 枝

17 長閑さやしらら難波の貝づくし 枝
銀の小鍋に出す芹焼 良
手枕にしとねのほこり打払 翁

うつくしかれとのぞく覆面 枝
つぎ小袖薫壳の古風なり 翁

八月十日頃、越前松岡にて翁と別れる。

もの書きて扇子へぎ分る別哉 翁
笑ふて霧にきほひ出ばや 北枝

「蕉門俳風の俳道に志あらん人は、世上の
得失是非に迷はず、烏鷺馬鹿の言語になづむ
べからず。天地を右にし、万物山川草木人倫
の本情を忘れず、飛花落葉に遊ぶべし。その
姿に遊ぶ時は、道古今に通じ不易の理を失は
ずして、流行の変にわたる。」と書き出される
「山中間答」は、この十八日間程翁に随伴し
た北枝が翁の正風俳諧論を書留めたものであり、
付録の「付方自他伝」(註・季刊連句6・7
号に詳しい)は、その後三年工夫し翁に見て
貰ったことが記されている。この刊行は天保
九年(一八三八)と遅かったが、写本で伝え
られ、転じ方の手引きとして大いに活用され
ていたようである。解り易く、合理的で、実
作、鑑賞にも非常に役立つ。

北枝は「奥の細道菅菰抄」に「至って風流
洒落なるものにて奇談人口に遺る」とあり、
「俳家奇人伝」には、友人と毎夜酒盃を重ね
たこと、盗人に入られた時も、家が焼失した
時も自若としていたことなどがあげられてい
る。自宅が焼失した折の句、

焼けにけりされども花は散りすまし

には、翁も元禄三年四月二十四日付けで、「さ
れども焼けにけりの御秀作、かかる時に臨み、
大丈夫感心。」の書簡を送っている。

元禄二年七月二十日には、翁に従い金沢郊
外野田山の裾野を散策した。その折の、

翁にぞ蚊屋つり草を習ひける

には感激している北枝の心情がよく現れてい
る。この心情を失わず、随伴した十五日余、
翁の言葉に渾身を傾け、書留めたのであろう。
この旅以後、再び翁に見えることは無かった。
享保三年(一七一八)五月十二日没。金沢市
山の上町、浄土宗心蓮社に「趙北枝先生」と
刻まれた戸室石の立派な墓がある。

池の星又はらはらと時雨かな 北枝
枯色深き四囲の山々 朱鷺子



北枝の墓

実験室—合評—

参加者 坂本孝子 鈴木美奈子 鈴木了斎
日高英二 日高玲

歌仙「雨脚の」 三吟フアックス文音

雨脚のあるとしもなし春の土

まだ新しき苗札の文字

魚島へ船出仕度は整ひて

煙草の箱をさぐるポケット

カーテンに月さすクリーニング店

急ぐ客来る青北風の中

檸檬の実玻璃の螺旋に庄しつぷし

同人雑誌肺病みし頃

雑魚寝してやがてわりなき児を宿す

聖母の色香消ゆることなし

この村のこの畑からこのワイン

灸の据ゑ場所そつと伝授す

月影に光る首領の脂汗

謀叛知らせに走る短夜

転調のトリルをのばすフェルマータ

疝気の筋は親ゆづりにて

長屋からどつと繰り出す花三分

蚤も虱もめかる蛙も

滴らす前衛墨書空海忌

阿頼耶識から言の葉の泡

突っかけてヤク買ひにでる雪模様

革ジャンパーに包む体臭

一代の騎士の称号許されて

御身ばかりを恋ひわたり候

鈴木了斎

坂本孝子

日高玲

斎

子

斎

玲

子

斎

子

斎

玲

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

盲目の手を引かれつつ新枕

黄楊の琴柱よ秘曲洩らすな

ロケットのおもちやは庭の池に落ち

連続前転ひねるフィニッシュ

月今宵老いし忠治が見えをきり

裸電球揺れて冷えゆく

牛井を考へて喰ふ秋相場

古き実印念入りに捺す

新興の街にも馴染み太極拳

チャットサイトの遠き友より

日のかげら花ともつれて散りやまず

幼きはやを放すせせらぎ

平成十五年二月十六日起首三月十六日満尾

子

斎

子

玲

子

斎

子

斎

子

玲

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

斎

子

の連句作品を見ますと発句に挨拶性が乏しいので

す。発句は顔を連衆に向けて、何らかの挨拶が含

まれてることが当然の事と思えます。これから

詩的世界に入ろうじやないかという挨拶心が重要

と思えます。

孝子 この三人で文音は初めてでしたので、気負

いがありすぎてもいけないし、失礼ですが、どう

でもいいような立句でも困るのです。発句を頂い

たこの日の、細雨が沁みとおる「春の土」の感触

が、よい挨拶と感じました。

玲 初めて付合をする連衆への挨拶として情感細

やかな発句でした。脇句は「新しき苗札」とその

場の実景を添え、励ましと希望をこめて、発句の

気分を受け入れていきます。お互いの挨拶心をさり

気なく述べ合い、三吟を始める幸福感が広がりが

ました。第三は景を転じ、氣勢、野心の色を出して

みました。

了斎 気合を入れてははじめようじやないかという

勢いが出ています。三句それぞれが挨拶になって

いる。

英二 「新しき苗札」「船出仕度」はポジティブな

感じで映りあっていますね。

玲 月の句は打越の漁師とクリーニング店の人が、

同じように仕事を終えて煙草をさぐる、ともとれ、

些か観音開きですが、漁仕度の賑いから静かな景

に転じました。新味ある月句で、郷愁を感じる景

でした。淋しい情趣が月の本情と響き合います。

美奈子 この月の句は新鮮な印象を受けました。

表では冒険しない、月は賞玩の月といった、やや

固定観念がある中で、この月は異色です。私は気に入りました。

了齋 それに、表の中で変に暴れてしまう句ではないです。「カーテン」、「クリーニング店」に隠されたリフレインもいいです。

孝子 人情は消して、夜の店のカーテンに月光を当ててみたのです。ただ、「ポケット」「クリーニング」「急ぐ客」は続くとも言えます。

*裏

孝子 折立は前句の「客」でなく「青北風」の感覚に付けたのがよかったですね。「青北風」と「檸檬」は清涼感でびったりと付いています。「色立」で、感覚的「移り」の付けでしょう。

玲 折立句は表現が斬新でした。

美奈子 折立の句、ここでは、なんといっても「玻璃の螺旋」がいいですね。

孝子 折立の檸檬から梶井を連想しました。「雑魚寝」はよい句で「聖母」へも流れがいいです。

了齋 貧乏な文学青年男女が寄り集まるとありがちなりアリエーを感じます。あわれがありますね。

玲 「雑魚寝」は生身の女性の現実的な側面を詠い「聖母」は女性性の持つ普遍的で神秘的なイメージが詠われています。女性の二面が詠われ男性の恋のテーマが出ました。「この村の…」は軽いリズムで前句から転じました。

英二 「同人…」はピシヤリと巧みに付き、また次句へ恋句の流れは巧みです。「この村の…」の情景はよくわかります。「灸の…」は有心付で、「灸

を出すことで村の生活振り全体が鮮やかに出ました。

了齋 「謀反知らせに」は蕪村の「鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉」を思いました。

美奈子 「雑魚寝」から「この村の」までの三句と、「月影に」から「転調の」にいたる三句のわたしは、この一巻のなかで、一番光っている部分ですね。ドラマ性、勢いのよさ、ぞくぞくさせます。

「鳥羽殿へ…」の連想までは思い至りませんでしたが、蕪村の句の物語性を想起させました。

英二 「灸」に月句は意表を突く巧みな付味で俳諧味充分。ドラマチックな場面が想像され人間の修羅の世界という、現代連句ではあまり詠われない面白いシーンが展開されました。

孝子 「転調の…」の句はよい会釈の働きをしていると思います。「トリル」から「疝気」の発想に俳諧味がありました。

英二 「転調の…」の付けは傑作だと思う。前句の切迫した映像に音楽を合わせた、一種の「響き付」でしょう。言うなれば場前のBGMとも取れ、新らしみがあります。「フェルマータ」には俳諧味、滑稽味があります。「疝気」は腹の中のトリルと言う事で面白いし巧いです。しかし、ウ六句目の「灸」に帰る感じがします。

美奈子 「伝授」と「親譲り」も帰りますね。

孝子 「伝授」「親譲り」の言葉の問題より、やはり「灸」「疝気」という古めかしい病体の近さが問題です。この面は二句目で肺も病んでいましたね。

「疝気」から「長屋」「蚤」への流れは一巻の笑

いどころです。

玲 そうですね。「疝気」からの三句は、勢いある早い流れで畳み込むように付けられています。「拍子」「響き」は連句の音楽性とも言えますが、

ここはシンフォニーの楽章が終わるイメージです。英二 花句「長屋の花見」は幾つかのドラマの映像が考えられ面白く庶民性が出ました。端句の蚤・虱・蛙は長屋住いの人達の暗喩でしょうか、すこし滑稽が強いようですが、一句位こういうのがあってもいいですね。

ウラは全体としてとてもいい流れです。この巻の庄巻はここですね。面白いのができました。

*名残の表

孝子 折端がたたみかけるように生類が出ましたので、ここでは釈教を出したくなりました。

了齋 この釈教はいいですね。それに、蚤虱が前衛墨書の墨が飛んだように見えるとも付きます。

玲 次に「阿頼耶識」が付きました。このあたり、術学趣味とも思いますが珍しい題材です。連衆の側としては、ワクワクしながら付合を楽しんだ場所です。

了齋 言葉になる以前の言葉の種みたいなものがそこから出てくるというイメージで作りました。前衛芸術はそういう所を追求します。

孝子 いささか抽象的なので次ぎの句はリアルなものがいいと思ひ「突っかけ…」を選びました。

玲 次の「革ジャンパー」はよい付けでしたが、私の勝手な欲を言えば、もう一步深い人情がこ

で出せればよかったですと思ひました。悪いと知り

